

# === T A C S 情報 第4号 ===

(Toyama Agricultural Cultivation Management Information System)

令和4年6月21日

農業技術課 広域普及指導センター

## 1 気象経過

### (1) 気温

5月の平均気温は、18.1℃（対平年差+0.6℃）と平年に比べ高かった。

6月上旬の平均気温は、19.2℃（同-1.1℃）と平年に比べ低かった。

6月中旬の平均気温は、22.1℃（同+0.8℃）と平年に比べ高かった。

### (2) 降水量

5月の降水量は、111.0mm（対平年比90%）と平年並であった。

6月上旬の降水量は、33.5mm（同159%）と平年に比べ多かった。

6月中旬の降水量は、24.0mm（同47%）と平年並であった。

### (3) 日射量

5月の平均日射量は、20.8MJ/m<sup>2</sup>/日（対平年比113%）と平年に比べかなり多かった。

6月上旬の平均日射量は、20.5MJ/m<sup>2</sup>/日（同105%）と平年に比べ多かった。

6月中旬の平均日射量は、18.6MJ/m<sup>2</sup>/日（同109%）と平年に比べ多かった。

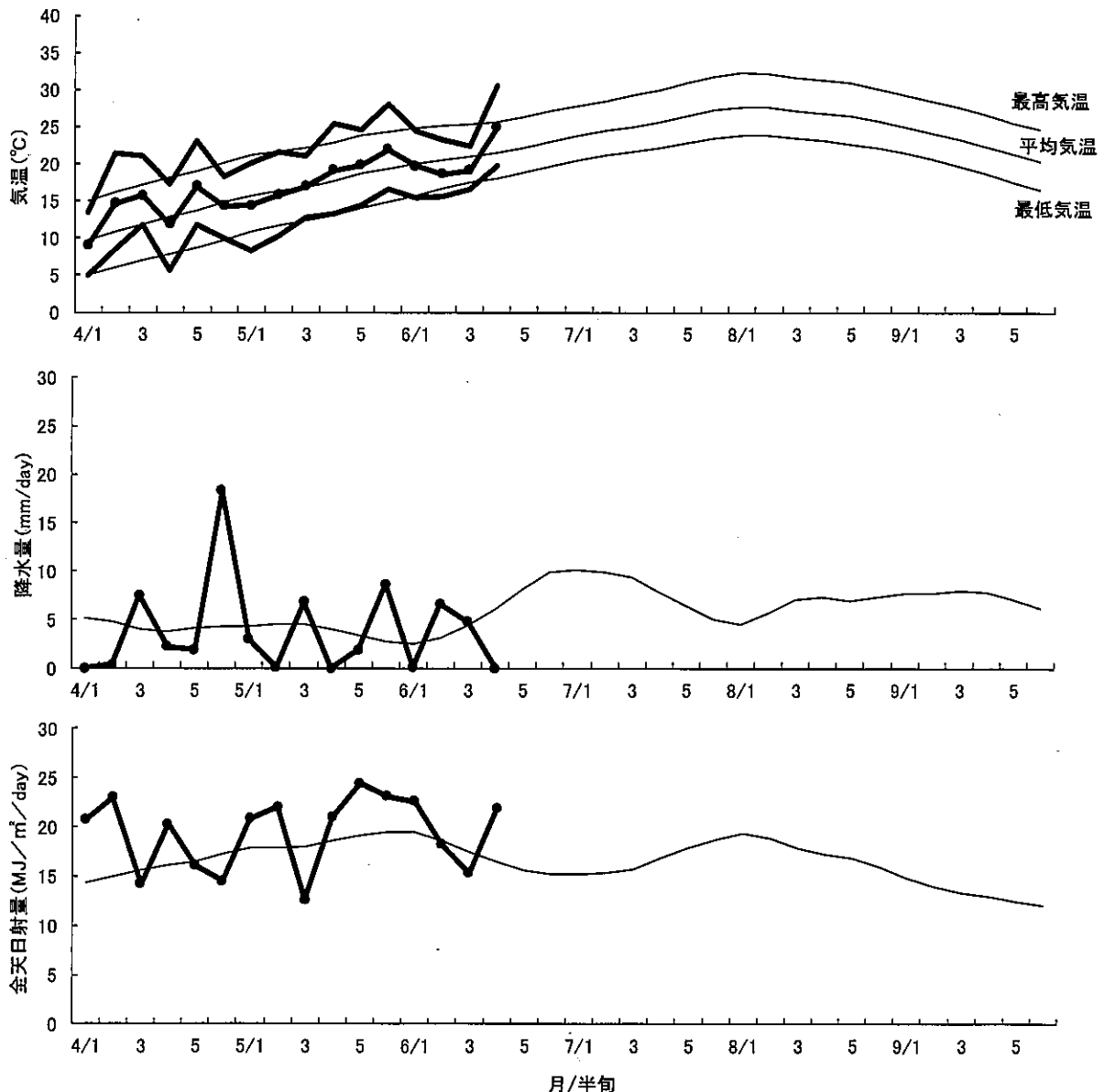


図1 令和4年の気象経過（富山地方気象台）

## 2 生育状況（生育観測ほデータ）

### (1) てんたかく

平年に比べ、草丈は短く、莖数は多く、葉齢は0.2葉進み、葉色は並となっている。

葉齢を揃えて比較すると、平年に比べ、草丈は短く、莖数は多く、葉色は並となっている。

幼穂形成期は、6月25日頃と見込まれる。

今後、平年並の気温で推移した場合、出穂期は7月17日頃と見込まれる。

表1 「てんたかく」の生育状況（6月21日 生育観測ほ）

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	莖数		葉齢	葉色		幼穂 形成期	出穂期
			(本/株)	(本/m <sup>2</sup> )		葉色板	SPAD		
R4	5月1日	45.3	33.0	716	10.9	4.4	42.3	(6月25日)	(7月17日)
R3	5月3日	47.7	31.5	677	10.4	4.6	42.0	6月27日	7月17日
平年	5月4日	50.7	30.0	636	10.7	4.5	41.4	[6月24日]	[7月16日]
前年比・差	-2	95	105	106	0.5	-0.2	0.3	(-2)	(0)
平年比・差	-3	89	110	113	0.2	-0.1	0.9	(+1)	(+1)

注1) 平年 : H24~R3の平均、ただし幼穂形成期の平年値〔 〕は、R2、3年の平均

注2) 本年の幼穂形成期及び出穂期は予測値

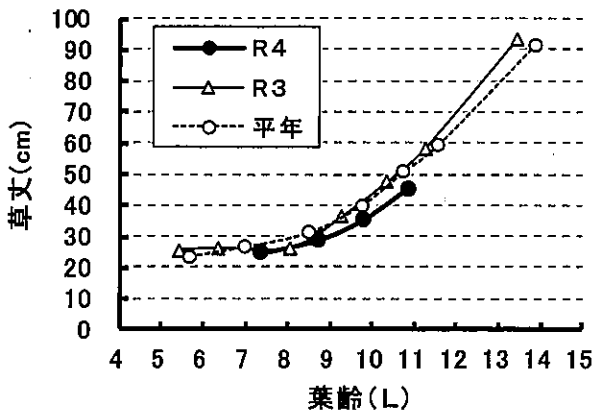


図2 草丈の推移（生観てんたかく）

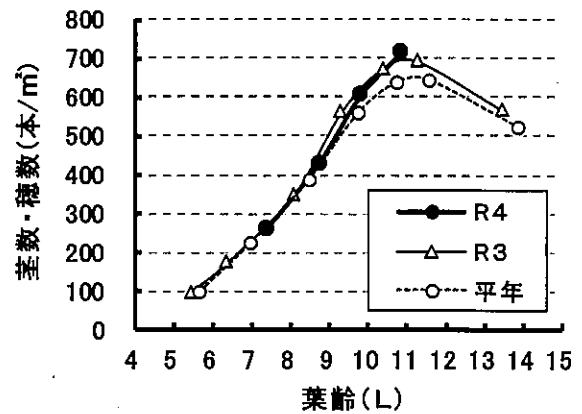


図3 莖数の推移（生観てんたかく）

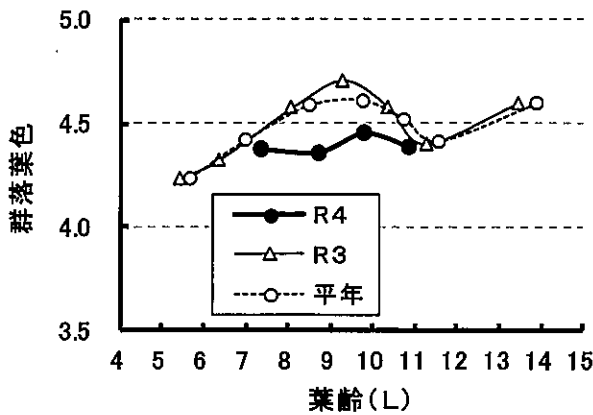


図4 葉色の推移（生観てんたかく）

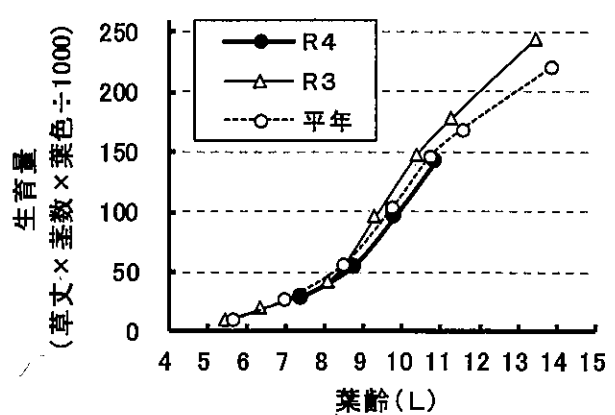


図5 生育量の推移（生観てんたかく）

## (2) コシヒカリ

平年に比べ、草丈はやや短く、茎数は多く、葉色、葉齢は並となっている。

今後、平年並の気温で推移した場合、幼穂形成期は平年並の7月11日頃と見込まれる。

表2 「コシヒカリ」の生育状況(6月21日 生育観測ほ)

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢	葉色		幼穂 形成期
			(本/株)	(本/m <sup>2</sup> )		葉色板	SPAD	
R4	5月13日	38.7	25.3	558	9.6	4.3	41.7	(7月11日)
R3	5月14日	40.4	21.1	461	9.1	4.4	40.6	7月13日
平年	5月14日	43.1	23.3	501	9.6	4.3	40.1	7月11日
前年比・差	-1	96	120	121	0.5	-0.1	1.1	(-2)
平年比・差	-1	90	109	111	0.0	0.0	1.6	(0)

注1) 平年 : H24~R3の平均

注2) 本年の幼穂形成期は予測値

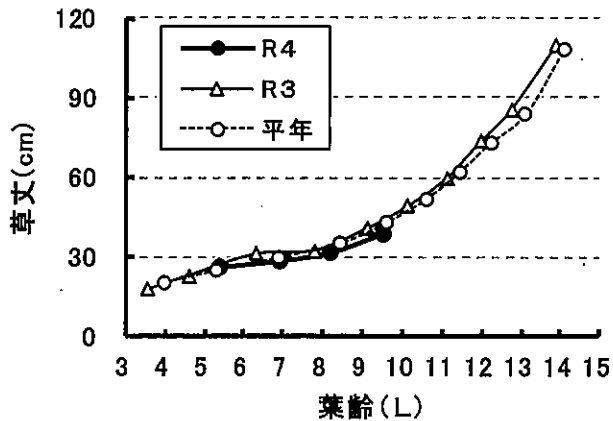


図6 草丈の推移 (生観コシヒカリ)

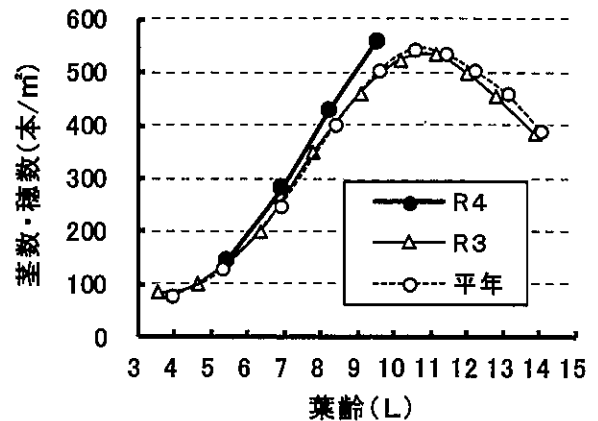


図7 茎数の推移 (生観コシヒカリ)

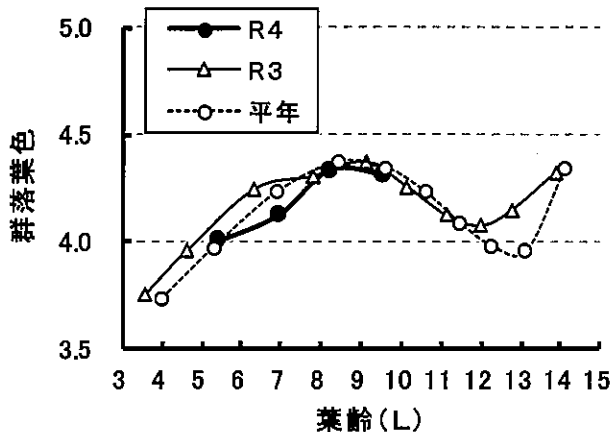


図8 葉色の推移 (生観コシヒカリ)

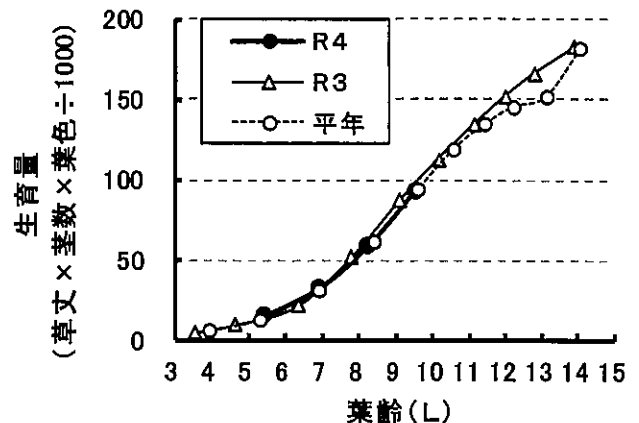


図9 生育量の推移 (生観コシヒカリ)

### (3) てんこもり

平年に比べ、草丈は短く、茎数、葉色は並、葉齢は0.2葉遅れている。

葉齢を揃えて比較すると、平年に比べ、草丈は短く、茎数は並となっている。

今後、平年並の気温で推移した場合、幼穂形成期は平年より1日程度遅い7月13日頃と見込まれる。

表3 「てんこもり」の生育状況(6月21日 生育観測ほ)

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢	葉色		幼穂 形成期
			(本/株)	(本/m <sup>2</sup> )		葉色板	SPAD	
R4	5月8日	31.9	33.5	641	10.5	4.4	41.4	(7月13日)
R3	5月9日	34.9	30.7	596	10.5	4.4	40.8	7月15日
平年	5月8日	38.1	33.5	635	10.7	4.4	40.3	7月12日
前年比・差	-1	91	109	108	0.0	0.0	0.6	(-2)
平年比・差	0	84	100	101	-0.2	0.0	1.1	(+1)

注1) 平年 : H24~R3の平均

注2) 本年の幼穂形成期は予測値

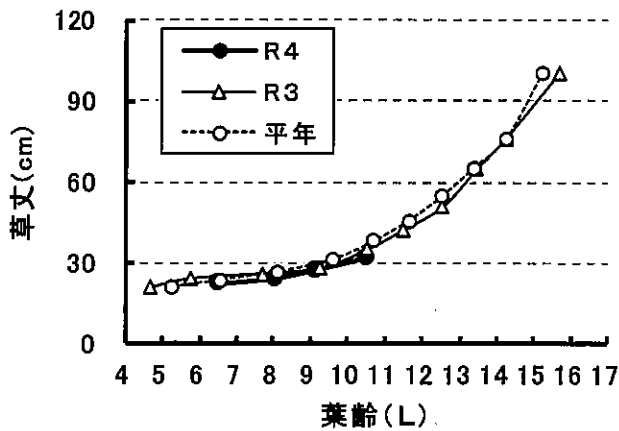


図10 草丈の推移(生観てんこもり)

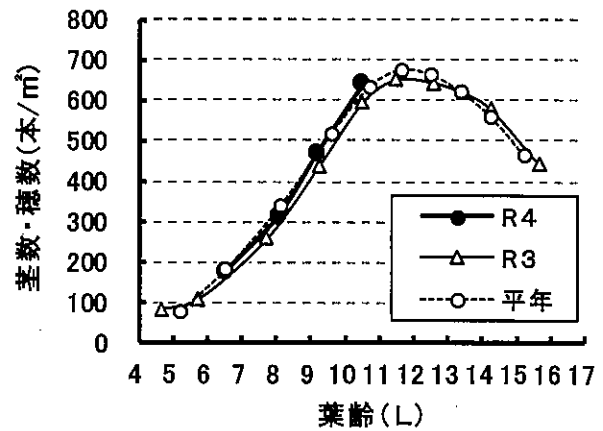


図11 茎数の推移(生観てんこもり)

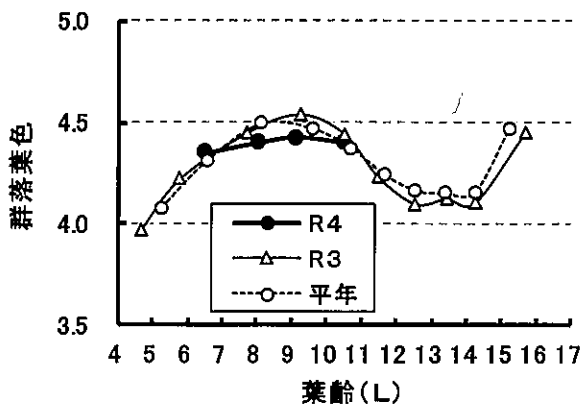


図12 葉色の推移(生観てんこもり)

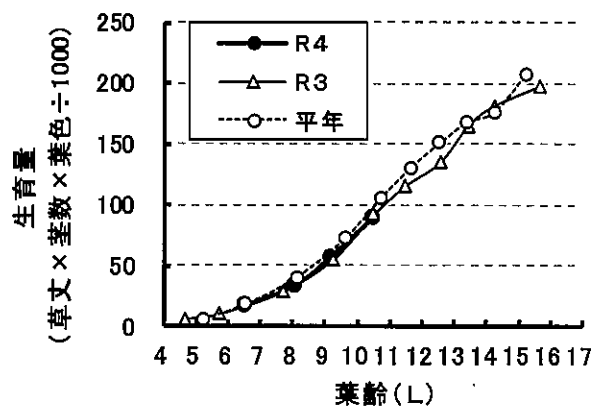


図13 生育量の推移(生観てんこもり)

### 3 当面の技術対策

- ・「コシヒカリ」、「てんこもり」は、中干し後の間断かん水で、幼穂形成期頃までに足跡の深さ 3 cm 程度の土壤硬度に誘導する。
- ・幼穂形成期以降は、飽水管理（足跡に水が残る程度の湿潤状態を維持）を行う。

#### (1) 「てんたかく」の管理

- ・幼穂形成期は、6月25日頃と見込まれる。
- ・肥効調節型基肥栽培では、安易な追肥は過剰籾数や割籾となるので原則、施用しない。ただし、現在の葉色が4.0（砂壤土4.2）より淡い場合は、直ちに窒素成分で1.0kg/10a程度の追肥を行う。
- ・分施肥系では、穂肥は表4を目安に施用する。ただし、過剰籾数を防ぐため、埴土～埴壤土では幼穂形成期の葉色が4.3以上かつ莖数650本/m<sup>2</sup>以上の場合、沖積砂壤土では葉色が4.5以上かつ莖数700本/m<sup>2</sup>以上の場合には、1回目の穂肥は施用しない。
- ・幼穂形成期以降は、稲体の活力を維持するため、飽水管理を行う。

※ 出穂期の見込み：7月17日頃（今後、平年並の気温で推移した場合）

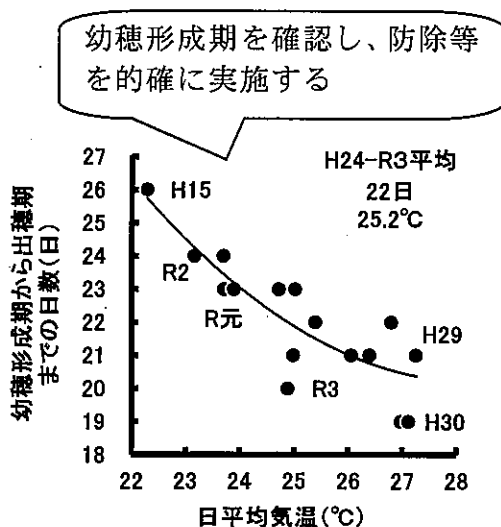


図14 幼穂形成期から出穂期までの平均気温と日数の関係（生観てんたかく）

表4 「てんたかく」の土壤区分別穂肥窒素施用量の目安 (kg/10a)

土壤区分	1回目	2回目
	施用時期 幼形期	施用時期 幼形期の10日後
沖積 埴壤土	1.5	1.5
埴土	1.5	1.8
砂壤土	2.0	2.0
洪積 埴壤土～埴土	1.5	1.8

#### (2) 「コシヒカリ」の管理

- ・今後、平年並の気温で推移した場合、幼穂形成期は平年並の7月11日頃と見込まれる。
- ・今後、葉色の急激な低下を防ぐため、中干し後の間断かん水は、乾かしすぎないように留意し、幼穂形成期頃までに土壤硬度を「足跡の深さ3cm程度」に誘導する。ただし、葉色が濃いほ場では、幼穂形成期まで落水期間が長めの間断かん水を行う。
- ・安易な窒素の中間追肥は、過剰分けつや過剰籾数を招くので原則、施用しない。
- ・これまでケイ酸質資材を散布していないほ場では、これらの資材を積極的に散布し、稈質を強くする。
- ・幼穂形成期以降は、稲体の活力を維持するため、飽水管理を行う。

### (3) 「てんこもり」の管理

- ・ 今後、平年並の気温で推移した場合、幼穂形成期は平年より1日程度遅い7月13日頃と見込まれる。
- ・ 今後、葉色の急激な低下を防ぐため、中干し後の間断かん水は、乾かしすぎないように留意し、幼穂形成期頃までに土壌硬度を「足跡の深さ3cm程度」に誘導する。
- ・ 幼穂形成期以前に葉色が4.0（砂壤土4.2）より淡くなる場合は、直ちに窒素成分で1.0kg/10a程度の追肥を行う。
- ・ 幼穂形成期以降は、稲体の活力を維持するため、飽水管理を行う。

### (4) 病虫害防除の徹底

#### ①斑点米カメムシ類

- ・ 今後、気温の上昇に伴い発生量が多くなると見込まれるので、イネ科雑草の穂が出ないように草刈りを徹底する。
- ※ 草刈り運動期間：7月1日～10日 一斉草刈り日：7月2日～3日
- ・ 本田内のノビエやホタルイも、斑点米カメムシ類による被害を助長するので、除草に努める。
  - ・ 麦あとほ場において、後作までに日数を要する等の場合は、雑草の穂が出ないように草刈りや耕起等により管理する。

#### ②いもち病 ※平年の葉いもちの初発確認日 7月10日（R3：7月15日）

- ・ 県内では、準感染好適日が6月6～9、15～17日に出現している。BLASTAM情報（農業研究所）を参考に、常発地を中心に巡回し、葉いもちの発生がみられたら直ちに防除する。

BLASTAM情報（葉いもち予測システム）HPのURL

[http://taffrc.pref.toyama.jp/nsgc/nougyou/link\\_flat.phtml?TGenre\\_ID=314&t=pdf2](http://taffrc.pref.toyama.jp/nsgc/nougyou/link_flat.phtml?TGenre_ID=314&t=pdf2)  
（農林水産総合技術センター農業研究所HPの研究関連情報に掲載）

#### ③紋枯病 ※平年の初発確認日 6月23日（R3：7月1日）

- ・ 前年多発したほ場で箱施薬剤を施用していない場合は、出穂3～4週間前（粒剤）、または、品種ごとの散布適期（粉剤、液剤等）に防除を確実に行う。
- ・ 「てんこもり」ほ場では、箱施薬剤を施用した場合でも出穂7日前頃に発病株率を確認し、必要に応じて防除を行う。
- ・ その他のほ場では、要防除水準を参考にし、適期に防除を行う。

表5 紋枯病の薬剤散布適期と要防除基準

品 種	薬剤散布適期 (防除要否判定時期)	要防除水準 (発病株率)
てんたかく	出穂14日前頃	5%
コシヒカリ	出穂10日前頃	15%
てんこもり	出穂7日前頃	15%※

※「てんこもり」は基本防除とする。発病株率は追加防除の目安（暫定値）。

#### ④白葉枯病

- ・ 大雨により浸水や冠水した場合、白葉枯病が発生しやすくなるので、常発地等では、オリゼメート1キロ粒剤を出穂3～4週間前に散布する。

# 「富富富」の生育状況と当面の技術対策について

## 1 生育状況（生育観測ほ等データ）

近年に比べ、草丈は短く、茎数、葉色、葉齢は並となっている。

今後、近年並の気温で推移した場合、幼穂形成期は近年並の7月13日頃と見込まれる。

表1 「富富富」の生育状況（6月21日 生育観測ほ等）

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢 (L)	葉色		幼穂 形成期
			(本/株)	(本/m <sup>2</sup> )		葉色板	SPAD	
R4	5/16	31.7	24.3	511	9.2	4.4	43.2	(7/13)
R3	5/16	33.9	20.9	450	8.8	4.4	41.9	7/15
近年	5/15	36.0	22.8	491	9.2	4.4	41.9	7/13
前年比・差	0	94	116	113	0.4	0.0	1.3	(-2)
近年比・差	1	88	106	104	0.0	0.0	1.3	(0)

注1) R4：生育観測ほ、登熟向上収量安定化試験・対照区（合計8カ所）の平均

R3：生育観測ほ、良食味栽培・対照区、密苗栽培・対照区（合計12ほ場）の平均、近年：H29～R3の平均

注2) 本年の幼穂形成期は予測値

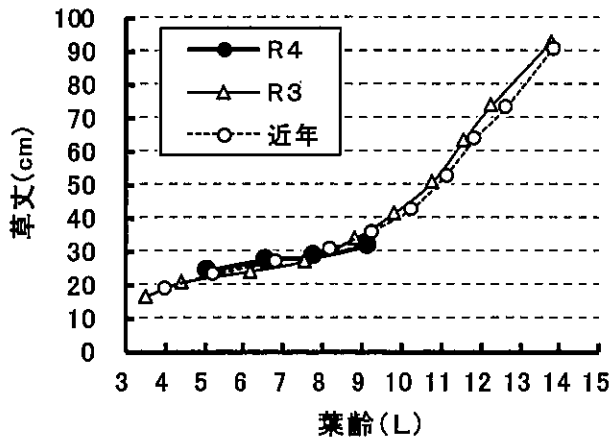


図1 草丈の推移（富富富生育観測ほ等）

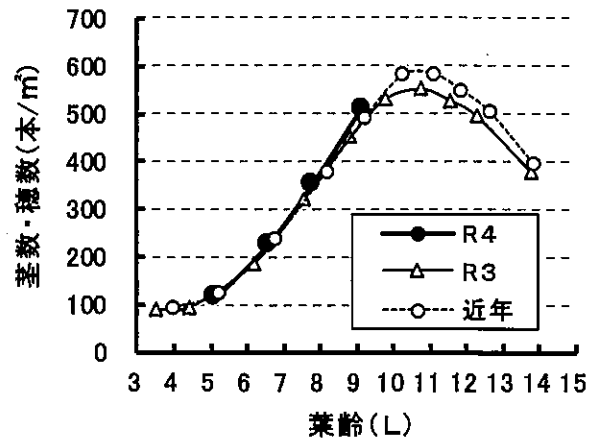


図2 茎数の推移（富富富生育観測ほ等）

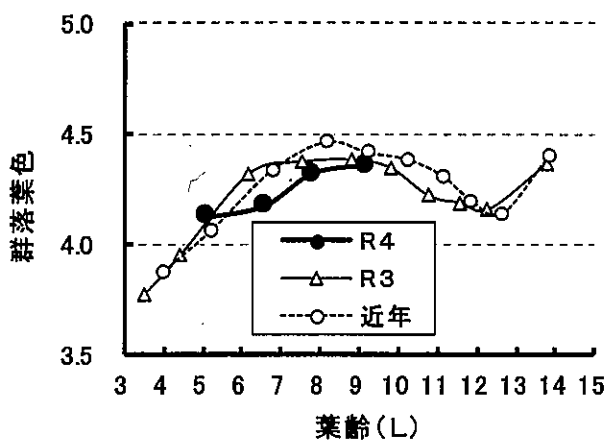


図3 葉色の推移（富富富生育観測ほ等）

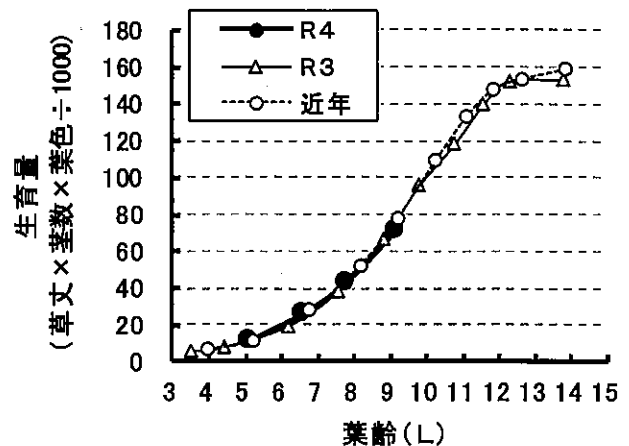


図4 生育量の推移（富富富生育観測ほ等）

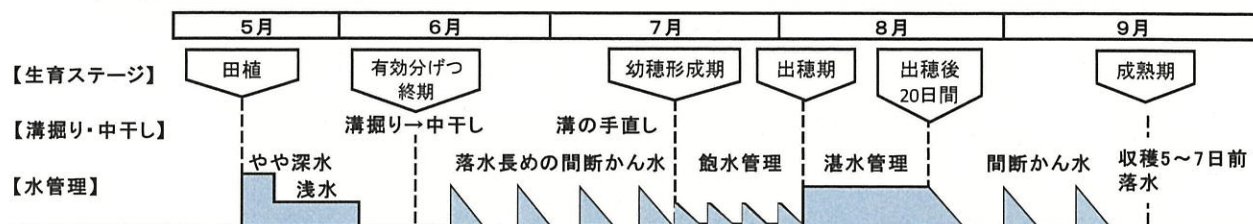
## 2 当面の技術対策

- ・「富富富」は葉色がやや濃く推移することから、中干し後は幼穂形成期まで落水期間が長めの間断かん水を行う。
- ・幼穂形成期以降は、飽水管理（足跡に水が残る程度の湿潤状態を維持）を行う。
- ・分施栽培における穂肥は、1回目を幼穂形成期の7日後頃に窒素成分で0.75～1.0kg/10a、2回目を1回目の7日後に窒素成分で1.5kg/10aを基本とする。

### (1) 水管理

- ・ 籾数の適正化のため、中干し後は幼穂形成期まで落水期間が長めの間断かん水を行い、幼穂形成期のSPAD値35（群落葉色4.0程度）に誘導する。
- ・ 幼穂形成期以降は、稲体の活力を維持するため、飽水管理を行う。

#### <水管理のイメージ>



「富富富」は葉色がやや濃く推移することから、中干し後は幼穂形成期まで落水期間が長めの間断かん水を行う。

### (2) 分施栽培における穂肥施用

穂肥は1回目を幼穂形成期の7日後頃（幼穂長15mm程度）に窒素成分で0.75～1.0kg/10a施用し、2回目を1回目の7日後に1.5kg/10a施用する。

なお、幼穂形成期の茎数が580本/m<sup>2</sup>以上、またはSPAD値が35（群落葉色4.0）以上の場合は、1回目の穂肥を施用せず、幼穂形成期の14日後頃に窒素成分で1.5kg/10aを確実に施用する。

表2 幼穂形成期の生育の目安

草丈 (cm)	茎数 (本/m <sup>2</sup> )	SPAD	群落葉色	生育量	
				SPAD	群落葉色
62	580	35	4.0	125	140

注) 生育量 SPAD: 草丈×茎数×SPAD÷10,000

群落葉色: 草丈×茎数×群落葉色÷1,000

### (3) その他の管理

病虫害および雑草防除は、コシヒカリに準じて実施する。ただし、生育期間を通しての化学合成農薬の成分使用回数が12以内となるよう留意する。

なお、残草がある場合は、草種に対応した液剤等を用い、雑草に確実に付着するようていねいに散布する。

次回の調査日は6月28日（火）です。

「てんたかく」の幼穂形成期の確認をお願いします。